

人生ハンド仏句

第48号

H. 18. 3. 1
(毎月1日発行)

身延山の菩提梯

住職 谷川寛俊

先日、身延山に参拝して来られた一族の方が「いつもお参りしても有り難く、心が洗われる思いです。ちや」と喜んでお話をして下さいました。そしてあの二八七段もある石段の話になり、「ところで、あの石段はどういういわれがあるがけ?」という質問が出ましたので、ご紹介したいと思います。

仁蔵は母親と佐渡から身延山にお参りしました。奥の院にも行き、いよいよ帰るとなっても坂の下でお堂の方角を拜んでいる母に「そろそろ帰りましょうよ」と促します。母は「分かっているよ。だけど、ここに石段があったらね」と一言。その時は聞き流してしまうのですが、母が亡くなってから、その事が耳から離れなくなり、「石段があれば」という意味では造らなきゃいけないという意味ではないか」と思い、その日から人が漁をしないところにも出かけ、必死で働きます。

そして、この程度あれば石段も造れるだろうと身延へ旅立ちます。途中、鰻沢(かじかざわ)で宿を探しますが、一軒として明かりのついた家がない。やっと宿を見つけたが、「この地区は何年来の飢饉で食べる物がなく、布団もありません」と宿屋の主人が答える。けれどもこの村人達は、いつ飢え死にするか分からない

編集・発行
玉蓮山 真成寺
編集部
TEL・FAX (0765)22-2268
メールアドレス
kokorochanthk@ybb.ne.jp
ホームページアドレス
<http://www.geocities.jp/sinjyoujitoyama108/>

状態なのです。

この懐にあるお金をこの方達に差し上げれば、助かるかもしれない。しかし母の望みも叶えない。

一晩中、悩みに悩んだあげく、「この人達を見殺しにするわけにはいかない」と決断、お金を宿屋の主人に託し、仁蔵は佐渡に戻ります。そして前よりも更に働きます。

ある日、山の頂上が光り輝いているので、登ってみると何と金山でした。それで届け出たところ、報酬を受け取るようになります。

思いがけないお金は身延の石段に使おうと、再び身延へ向います。鰻沢の村も明かりがあふれていました。以前泊った宿屋へ行き、主人は寄付をしてくれた人物だと気付きます。

仁蔵は身延に石段を作るために来たと話します。

村の人々は「私達が手伝わらないわ

けにはいかな」と申し出て、力を合わせ造ったといわれています。この石段菩提梯の菩提は悟り、梯とは階段です。つまり、悟りに到達する為の階段という意味です。

仁蔵という人物が母親の遺志を受け継ぎ成し遂げただけでなく、困っている人々を助けた。物事は出来るまでに加わった人の心の動きが大切なのだと思います。

「自分の力でここまでやってきた」と言っていれば、いつまでたっても何も出来ません。いつも、仏様、日蓮聖人、そしてご先祖様のお蔭でここまでこれたんだと言う心を忘れてはいけません。



菩提梯 上から下を見下ろした写真です
めまいしそうですね